

私が経験した東日本大震災

福原 雄幸

宮城県仙台市在住の福原です。今回の震災で亡くなられた多くの方々に、謹んで哀悼の意を表します。

被災県在住のメンバーとしてレポートするようにとの会長命令により、今回の地震と避難生活のことなどを車椅子使用者である私の目線から書き綴ってみます。海から遠い高台のマンションに住んでいるため津波の影響は無く、地震による建物とライフラインへの被害が主なものです。

私と家族の被害などは些細なもので、津波による被災地域の皆さんに比較すべきものもありません。また、被災地を包み込んだあの独特の空気感など自分には到底文章にできるはずもなく、ましてや事実関係すら伝えきれないと思いますが、あくまでも自分自身の記録として残そうとおもいます。

大地震発生！

その日、妻の仕事が休みなのでのんびりと平日の朝を迎えました。午前中にそれぞれの用事を片付けるため別々の車で、私は街の中心部へ、妻は行きつけの美容室のある多賀城市へ行き、その帰路にあの巨大地震に遭遇したのです。

用事を済ませた私は、コンビニにでも寄って昼食に何か買って帰ろう、そんなことを考えながら車を走らせていました。午後二時半を過ぎた頃です。

それは仙台市青葉区の中心部、七十七銀行本店とダイエー仙台店のある交差点で赤信号のため停車した直後に起きました。ゆっくりとそして長い時間（に感じられた）の揺れがあり、それが突如ギアチェンジしたかのような強い揺れに変わり、目の前では交差点内にもかかわらず危険を感じた車が急停車するのが見えました。私はシートから跳ね上げられ左右に振られ窓ガラスに頭をぶつけるほどの激しい揺れに、必死にハンドルにしがみつきましたがありません。前傾姿勢のまま、ビル屋上の鉄塔が激しく歪みながら揺れ動き、そしてゆっくりとスローモーションのように倒れて、階下の窓ガラスを割る様子を唾然として見ていました。周囲のビルもあちらこちらで窓ガラスや外壁のタイルが割れ落ちています。ただ事ではないと感じたものの、海岸近くに住んだ経験のない私には、この後に巨大な津波が押し寄せるなどということは思いもしないことでした。

交差点から後ろに少し離れたところに妻の勤務先のビルがあり、気が動転している私はそのビルへ迎えに行こうと考えましたが、携帯電話が全く機能せず連絡ができません。30階建てのそのビルは、バックミラー越しに見えるのですが、どうやら外見は無事なようなのでとりあえず帰宅することにしました。

動き始めた車列に従い車を進ませましたが、停電で信号が消えた次の交差点では、車が一台、信号機に正面から突っ込んだらしくフロント部を柱にめり込ませて止まっていた。激しい揺れの中を走行中にハンドルを取られたのでしょうか。さらに自宅に到着するまでの途中で様々な地震の被害を目撃しました。それは崩れ落ちたビルの壁であったり、民家の屋根瓦であったり、建物から退

避して外に集まって怯えている人々です。そして何より怖かったのは自分自身が走行している道路が、あちらこちらで陥没やひび割れ、地盤沈下で段差になっていることでした。もちろんコンビニは営業しているはずもなく、空腹のまま自宅マンションの駐車場まで普段の数倍の時間を経てたどり着きました。

自宅に入れない

遠目には建物は無事に見えたのですが、敷地内は長い亀裂が走って裂け、外壁のタイルが所々剥がれ落ちていました。さらに建物周辺の地面は15センチから20センチほど地盤沈下し、バリアフリーだった入り口は車椅子では入りにくくなっていました。もちろん地震の揺れと停電によりエレベータは止まっており、車椅子の私は7階の自宅へは行くことができません。ここまで記した惨状を見ながらもこの時の私はまだ軽く考えていたのです。停電はすぐに復旧するだろうし、エレベータも数時間後には業者がきて動かしてくれるだろう。市内あちこちのビルも停止しているだろうから、ひょっとしたら1~2日は無理かもしれないかなという程度です。管理人から水道とガスも止まっている事を聞かされましたが、いつものキャンプ道具の出番か?などと考えたりしていたものです。

三月とはいえその日の仙台は雪が舞うほど寒く、車の中に退避しているしかありません。携帯電話は相変わらず不通です。突然、窓を叩く人がいて、それは我が妻でした。その時やっと今日は休暇で美容室に行くと言っていたことを思い出し、無事だったことに安堵です。

次に自宅の状況と留守番していた2匹の飼い猫が心配になり、妻が階段で自宅に行ってみました。今まで経験したこのない室内の破壊状況に驚き、猫たちを半狂乱になって探したそうです。逃げ込んだ風呂場で浴槽の水を被り、家具の小さな隙間で声も出せずに震えている小さな家族をやっとの思いで車内に連れ出せました。

自宅に入れないとなれば、どこかに避難するしかありません。道路を隔てた向かいの緊急避難所になっている小学校の地下には飲料水の大きなタンクが埋設され、隣の市民センターには非常用食料の乾パンなどが備蓄されていることは知っていました。しかし、ペットを連れては行けません。小学校には車椅子で利用できるトイレなどもおそらく無いであろうと思われました。こうなると自力でキャンプするしかありません。最悪の場合、校庭にテントを張らせてもらおうとも考えていました。

とりあえず数日の避難キャンプ生活の準備です。その日、妻は階段で7階の自宅と駐車場を10回は往復したでしょうか。大きな余震が何度もあり、自宅に居ると怖かったと言っていました。ライフラインさえ復旧すればすぐに自宅に入ると安易に考えていた私に、妻が室内の様子を写真に撮って見せてくれました。

写真には倒れるものは全て倒れ、落ちるものは全て落ち、割れるものは全てが割れて足の踏み場も無い室内の様子が映っていました。驚いたのは80kg以上もある重い大型のブラウン管テレビが、1mほどの高さの台から落ちていたことです。落ちた床にもかなりのダメージがありそうです。建物やライフラインが無事であったとしても、これでは住めるまでに相当な時間が必要であり、妻と私の二人だけでは到底手に負えないと思われました。

津波発生

車載テレビでは津波が発生したことを伝えていました。それはこれまで見たことも聞いたこともない巨大な津波です。沿岸部の町が壊滅的だとか、石油コンビナートで火災が発生したなど、あまりの被害の大きさに言葉を失いました。

数日後に分かったことですが、妻が先刻までいた美容室付近まで津波は押し寄せ、帰宅する経路によっては津波や火災で追われる車の渋滞に巻き込まれていた可能性があります。よく無事に戻れたものです。地震発生時は美容室を出てすぐ側のスーパーで買い物の途中で、立っているのもままならない強い揺れと天井が落ちるのを見て精算前の買い物籠を放置して店外に飛び出したとの事でした。その買い物途中の食料があれば、この後どれだけありがたかったことか・・・

避難しよう

二人とも気が動転しているため準備に時間がかかり、すっかり日が暮れて周囲は真っ暗です。なにしろ停電なのだから当然なのですが、町全体が闇につつまれている様は不気味です。ライフラインが完全に止まっている中では、キャンプをするにしても不安です。復旧する数日間までをどこに避難するか相談です。幸い車のガソリンはまだ半分以上残っているので、県内を脱出するには十分です。あとは行った先で食料と燃料や水などが確保できるだろう。そんな甘い考えは移動を開始してから30分も待たずに打ち砕かれたのです。

まずはなじみの栃木県那須町のキャンプ場に行こうとしました。予約もしていないのに何とかなるだろうとは無謀な考えですが。しかしそれは、ラジオで東北自動車道が通行止めとなっていることを知り断念しました。

今度は秋田県に住む弟の元へ移動開始したのですが、今度は東北全体が停電していると知ります。さらには道路があちこちに亀裂が走り段差ができており、停電で真っ暗闇の中での走行は危険すぎます。しかも一般道しか使えないのでは何時間かかるかわからないため、とにかく自宅に引き返し朝を待ってから考えようと判断しました。

二人とも朝食以来なにも食べてなく空腹でしたが、なにしろ店が開いておらず買えません。自宅の状況から暗い中では危なくて食料の持ち出しはできません。そんな中で仙台市の郊外にあるスーパーの駐車場に人が集まっているのを発見し、立ち寄ってみました。そこでは被災した店内から食料を運び出し、暗闇の中を自動車のライトを頼りに外にならべて販売しておりました。手に入ったのはわずかなお惣菜でしたが、この非常時にスーパーの対応には涙が出そうになるほど嬉しくて感謝したものです。

自宅駐車場に戻ると、同じマンションの住人から、災害時避難所指定の小学校が天井や壁が崩落したため立ち入り禁止となり、1キロ先の中学校や隣の市民センターが臨時避難所となっていることを教えてもらいました。しかし、そこには暖房が無く毛布なども足りないとのこと。次第に事態の深刻さに気づき、自分の考えが浅く甘かったことを痛感したものです。

避難生活開始

深夜になり断続的に携帯電話がネットにのみつながるようになり、伝言サービスに無事であることを書き込む事ができました。午前二時を過ぎた頃に東京在住の妹から電話が入り、半狂乱の涙声です。半分あきらめつつもこんな時間まで電話をし続けていたのだとか。朝までには関東に住む妻

の姉兄とも連絡が取れました。秋田の弟からは避難して来いと連絡も来ました。これにはキャンプ道具一式が無事なのでこの場所でライフラインが復旧するまで野外生活でも大丈夫だと伝えました。大丈夫だとは伝えましたが夜の冷え込みは厳しく、羽毛のシュラフにくるまっけていても寒さを感じながらの車中泊です。雪も降っています。時々エンジンをかけては暖房を入れ、車載テレビが伝える被災地の情報や余震に怯えながらの夜となりました。猛火に包まれた気仙沼や石油コンビナートの映像や仙台市沿岸部に数百人の遺体が打ち上げられているなどの情報に恐怖と絶望感を感じたものです。

車の中で眠れぬ一晩を過ごし、朝になると駐車場で同様に過ごした人たちがいたことに気づきます。皆、余震が続き怖くて自宅には戻りたくないとの事でした。マンションの玄関ガラス扉には未だに会えない家族宛のメモがいくつも貼り付けてありました。鉄道・バス・地下鉄の全てが運行できなくなってしまい、帰宅困難者が市内中心部に多数残されたとのことでした。地震直後に帰宅できた私たち夫婦は運が良かったようです。

震災二日目～

届いた朝刊には今まで見たこともない大きな文字で「宮城震度 7 大津波 M8.8 国内最大死者不明者多数」「大津波 街消えた 初の巨大複合型」。自分たちは生かされたのだと思った瞬間です。

ふと気づくと、車で一晩を過ごしたマンションの住民たちは1階の集会室にカセットコンロとカップ麺を持ち込み食事をしています。我が家はカップ麺の買い置きがないため、室内が破壊された自宅から妻が食べられそうな食材を拾い集めてくるしかありません。ライフラインは完全に止まっているので、ここからはコンパクトにまとめてあるキャンプ用炊事セットの出番です。昨日の朝食以来まともな食事をしていなかった為か、冷凍していたご飯を麺つゆで味をつけ卵でとじただけの雑炊のなんと美味しかったことか……。飲み水は災害備蓄用にミネラルウォーターを箱買いしていたのが役立ちました。これまで箱単位でなど買った事が無かったのに、一ヶ月ほど前なぜかふと思いついて用意したもので、今回の震災を予期していたのかもしれない。

その後、食事は集会室、寝るのは車内という避難生活を5日間続けました。マンション住民が自宅を片付け始め、誰も使用しなくなった集会室にコットやマットを持ち込み、やっと手足を伸ばして寝ることができました。震災の被害の大きさや福島原発の爆発事故、これでもかと容赦なく襲い掛かる余震に怯えながらも、避難所で雑魚寝するよりは快適な生活だと信じながら過ごしていたような気がします。あたり一面暗闇の中で灯るランタンの小さな明かりのなんと暖かく感じられたことか。

避難生活中の情報源はラジオとカーナビのワンセグテレビ、スマートフォンでのインターネットです。スマートフォンの電源は車のシガーソケットから家庭用電源の交流 100V に変換するコンバータから取りました。これはかなり重宝し、親戚や隣近所の人に分まで充電してあげることができ感謝されたものです。避難所に行っても携帯の充電は出来ず、連絡手段が途切れている人たちが続出だったそうです。電気が復旧するまでフル稼働でした。

と、ここまでは今回も私の持論である「オートキャンプは災害対策になりうる」を正に自身で経験し、自立して生活していることに誇りすら覚えていました。ところが徐々に判ってきたのは、電気の復旧は数日で可能であるが、都市ガスは早くとも一ヶ月先、水道もほぼ同様であるということでした。

食料と燃料が手に入らない

三日目には自宅から持ち出した食料も車のガソリンも乏しくなり、市内中心部に求めて彷徨いました。わずかに営業しているガソリンスタンドには数キロに及ぶ長蛇の車列が続き、ほとんどの店舗はシャッターが閉まり、稀に営業している店にはこれまた長蛇の人の列です。石油精製施設に大きな損害があり、全く供給が止まっています。そのため前日の夜から並びやっと給油の順番がきてもわずかな量しか入れてもらえないのだとか。スーパーもコンビニも供給ルートである道路が使えなくなり、トラックの燃料も不足しているとのこと(他県ルートでの供給が始まった後でも、食料とガソリンの入手困難は2週間以上続きました)。

あきらめて帰途についたその時、まさに今開けようとしている自然食品の店が目にとまりました。健康食品や自然食品の類にはあまり縁の無い我が家ではありましたが、このときばかりはかなり割高な価格など全く気にすることなく、店に感謝して買い物をしました。被害の少なかった友人から、たくさんのおにぎりの差し入れがあったのもこの日でした。おにぎりがこれほど美味しいと思えたのは初めての事でした。

本格的に避難せねば

避難生活も5日目になり、ついに恐れていた事態が発生しました。

私の体に異変が起きたのです。車椅子ではトイレが自由に使えない環境なので水分摂取を控えていたのとストレスが限界に達したようです。尿がまるで濃いミルクのように白く濁ってしまい、明らかに膀胱に異変が起きているのがわかりました。膀胱機能にも障害のある私は泌尿器系のトラブルは何度も経験しています。その為の薬も常に手元にあり、その対処方法も充分理解しているのですが、ここまでひどい状態は初めてで、命の危険も感じました。かかりつけの病院に行けば即入院となるのですが、大きな余震の続く中に妻を一人置いておくのはあまりにも不安でした。祈るような気持ちで水分を大量に摂って膀胱を洗い流すようにし、抗生物質の薬を飲み続けてなんとか快方に・・安堵です。この事があって、仙台での避難生活に限界を感じ、ライフラインの整っている所に避難場所を移す決意をしました。

震災数日後、栃木県那須高原のなじみのキャンプ場から着の身着のままでもいいから避難して来いとの連絡を貰っていました。しかし、私の車はガソリンが乏しくなりつつあり、躊躇しているうちに原発事故により逆に危険だから来ないほうが良いと連絡があり断念しました。そこで、秋田県大仙市に住む弟に連絡し、ガソリンを携行缶に入れ迎えに来るよう依頼しました。しかし、秋田でも燃料の調達は仙台同様に厳しく、仕事を休み早朝からスタンドに並んでみたものの、順番が来る前に売り切れてしまったとの事でした。

山形県東根温泉へ

私と同じ障害を持つ仲間数人が山形県東根市の障害者温泉保養施設に避難している事を聞いていました。ダメ元で二人追加できないか確認してもらったところ、三泊なら可能という嬉しい返事です。しかし、私の車にはもうすでに山形県まで移動可能な燃料は残っていませんでした。

妻の軽自動車にはまだだいぶガソリンが残っているのですが、東北に住んでいるにもかかわらず雪道を運転する気など全く無い妻は冬用のタイヤを用意していません。私が運転できるのなら、夏用タイヤでも多少の雪道ならなんとか運転できる自信はあるのですが、妻の車には私が運転可能と

なる手動運転装置はありません。この状況で冬の峠越えは危険すぎるのですが、妻が山形行きを決心してくれました。

仙台市内は全く積雪も無く、道路も乾いています。それが山形県界に近づくとつれ、徐々に道路脇に雪が増えていき、案の定、県境の峠に差し掛かるとそこは吹雪でした。夏タイヤで雪道の登りは一度止まると、再発進が非常に難しく、場合によっては下って戻ることすらできなくなります。あちらこちらで車が立ち往生しているのをみて、ビバークも覚悟しましたが、運良く止まることなく峠を越えることができました。二人の体力も精神力も限界に近く、もう行くしかないのだという決死の思いだったと、がんばってくれた妻は後に語っていました。

グッタリと疲れきって宿に到着し、そこで6日ぶりに入る風呂は涙が出るほどありがたく感じました。食事でも普通に出てくるので、もう何も心配することはありません。心と身体が開放される喜びに「本当に生きていて良かった」と思いました。

2匹の猫たちは施設に入れられないので車の中に置いておくしかありません。車内にトイレと食事を用意し、ありったけの毛布や布で窓を塞ぎ車内にも敷き詰め、湯たんぽも置いて我慢してもらいました。峠での雪はやがて東根市にも降り始め、三月の大雪は珍しいと言われるほどの積雪となりました。そんな中、妻は頻りに様子を見に行っていたようです。

今度は秋田県へ

通常営業中のその施設では、他の予約の都合上三日間だけとの約束で宿泊しました。私たちが通常の料金を支払いそこを出た数日後、行政からの要請を受け障害をもつ被災者を無料で受け入れることが決まったそうです。被災地で困窮している人々には大きな朗報です。私たちが経験した安心と開放感を感じて欲しいものです。

施設に居る間に秋田の弟から連絡があり、大仙市では震災避難者を受け入れる体制が整い、しかも市営住宅のペット可のバリアフリー室に入れるので来いとの事でした。今度はガソリンも秋田の両親と弟が八方手を尽くし、なんとか片道分を入手してくれました。独力での避難生活に限界を感じていた私たちは願ってもいなかったこの申し出に頷くしかありませんでした。弟に迎えに来てもらい一旦仙台まで戻り、私の車に給油し、長期の覚悟で準備を整え秋田に向かいました。

それから二ヶ月間は秋田と仙台を何度も往復し、自宅の片付けをしながら再び戻れる日を待つ生活となりました。避難先の市営住宅には我が家のほかに福島県から原発事故の避難家族が複数組来ていました。こちらはいつ戻れるのか見当もつかないのです。先が見えている我が家とはずいぶん違います。それでも同じ被災者扱いされることに複雑な思いを覚えたものでした。増え続ける死亡者や行方不明者、大変な避難生活の様子をテレビや新聞で見聞きし、何の不便もない秋田での自分たちの生活に後ろめたさのようなものを感じ、やがてそんな様々なストレスや蓄積された疲労から体調を崩し、夜中に救急車を呼ぶ事態も発生しました。幸いそれは急激な血圧低下による目眩程度で大事には至りませんでした。

4月7日には大きな余震があり、秋田の避難先でも一晩停電する事態となりました。仙台の自宅は再び大震災直後同様、いや、それ以上の被害となり、ここに再び戻ってくる気力を無くしかけたものでした。仙台市内のライフラインは復旧しかけていたものが、これもまた再び振り出しに戻る有様で、結局は一ヶ月で復帰するはずの都市ガスは四月末まで延びてしまいました。

現在、そしてこれから

五月末日まで大仙市のお世話になり、ライフラインが復旧しなんとか住めるまでに片付いた我が家に戻ることができました。しかしマンション建物の損傷は大きく残り、罹災証明書には大規模半壊との判定が出されました。八月末現在、約6千万円の費用をかけて補修工事が始まろうとしています。幸いにも妻は元の職場に復帰でき、私もまた震災前と同様の生活に戻っています。

今回の経験は障害者福祉団体の事務局を担当する私にとって、今後の活動を左右する大きな指標となり、新たな課題を残す結果となりました。障害者や老人など体にハンディのある災害弱者にとって、安心できる環境を整えた福祉避難所が開設されていた事を私が知ったのはずっと後になってからです。しかも、そこを必要とする災害弱者を誘導するはずの行政はほとんど機能しておらず、不自由さを覚悟で一般避難所にいたわずかな人たちのみが医師や看護師の指示の元で行く事ができたと聞きました。一般の避難所で過ごすのには無理があり、余震に怯えながら自宅に留まるしかなかった人たちの事を思うと心が痛みます。また、多くの仲間達が私同様に車中泊を続ける中で体調をくずして入院していた事実も判明しています。仮設住宅のバリアフリーについては、入り口にスロープがあるだけで、車椅子使用者が生活できる作りではないなどの問題も発生しています。この震災による経験を生かし、我々自身がより良い環境を目指した活動を続けることが必要となるでしょう。

最後に、これまで多くの皆様にご心配をお掛けし、また多大な励ましとご支援を賜りました事に深く感謝申し上げます。